

ガラスの器と静物画

山野アンダーソン陽子と18人の画家

日本、スウェーデン、ドイツを拠点とするアーティストによる
ガラスの器と静物画、写真からなるユニークな展覧会を2024年1月より開催。

2018年、スウェーデン在住のガラス作家・山野アンダーソン陽子の発案で、山野が作ったガラスの器を18人の画家が静物画に描く Glass Tableware in Still Life プロジェクトが始まりました。古くから身近なガラスという素材を媒介に、山野と画家たちは、言葉と想像力を通じた対話を経て作品を制作しました。本展はガラスの器と静物画、写真家の三部正博が画家のアトリエで撮り下ろした写真などで構成されます。空間全体でアーティストたちの対話を体感し、それぞれの物語を楽しんでいただく展覧会です。



(左) ガラス：山野アンダーソン陽子 (右) 絵画：伊庭靖子 写真：三部正博

展覧会名	ガラスの器と静物画 山野アンダーソン陽子と18人の画家 Glass Tableware in Still Life: Yoko Andersson Yamano and 18 Painters
会期・会場	2024年1月17日(水) - 2024年3月24日(日) 東京オペラシティ アートギャラリー (ギャラリー1, 2)
開館時間	11:00 - 19:00 (入場は18:30まで)
休館日	月曜日(祝日の場合は翌火曜日)、2月11日(日・全館休館日)
入場料	一般：1400[1200]円 / 大・高生 800[600]円 / 中学生以下無料
主催	公益財団法人 東京オペラシティ文化財団
協賛	日本生命保険相互会社
協力	相互物産株式会社
後援	スウェーデン大使館
企画協力	ブルーシープ
お問合せ	050-5541-8600 (ハローダイヤル)

本展に関するお問い合わせ

東京オペラシティ アートギャラリー 【展覧会担当】 福島直 【広報】 市川靖子、吉田明子
Tel: 03-5353-0756 / FAX: 03-5353-0776 / E-mail: ag-press@toccf.com 〒163-1403 東京都新宿区西新宿 3-20-2
最新情報：本展特設インスタグラム @gtsl_exhibition

ガラスの器と静物画

山野アンダーソン陽子と18人の画家

展覧会概要

10年ほど前、スウェーデンを拠点に活動するガラス作家・山野アンダーソン陽子が、「自らのガラス作品を本にしてはどうか」と言われたことをきっかけに、「Glass Tableware in Still Life（静物画のなかのガラス食器）」というアートプロジェクトがはじまりました。それはとてもユニークなプロセスで成り立っています。まず画家が描いてみたいガラス食器を言葉で伝え、その言葉を解釈して山野がガラスを吹き、出来上がったガラス食器を見ながら画家が絵を描く。その後、写真家・三部正博が画家たちのアトリエを訪れて写真を撮り、デザイナー・須山悠里が本をデザインしました。スウェーデンとドイツ、日本を舞台にくり広げられたプロジェクトは、そうして生まれたガラス食器と絵画、写真を目にしてもらう機会を作りたいという思いから本展の実現につながりました。

宙吹きならではのわずかな歪みがうつろいやすいクリアーガラスの食器、画家たちによる親密な絵画、浮遊感をたたえたモノクロームの写真。それぞれの作品が語りだす声に耳をかたむけ、ストーリーをつむいでみてください。

参加作家

ガラス | 山野アンダーソン陽子

スウェーデンのストックホルムを拠点に活動するガラス作家。日本の大学を卒業後、北欧最古のガラス工場であるコースタ内の学校で吹きガラスの手法を学び、その後スウェーデンの王立美術工芸デザイン大学にて修士課程を修了。クリアーガラスを探求し、スウェーデン、イギリス、日本などで作品を展開する。



写真：三部正博

写真 | 三部正博

絵画 |

アンナ・ビヤルゲル、アンナ・カムネー、イルヴァ・カールグレン、イェンス・フェンゲ、カール・ハムウド、ニクラス・ホルムグレン、CM・ルンドベリ、マリーア・ノルディン、レベッカ・トレンス、石田淳一、伊庭靖子、小笠原美環、木村彩子、クサナギシンペイ、小林且典、田幡浩一、八重樫ゆい

映像 | センナイ・ベルヘ

グラフィックデザイン | 須山悠里

本展に関するお問い合わせ

東京オペラシティ アートギャラリー 【展覧会担当】 福島直 【広報】 市川靖子、吉田明子
Tel: 03-5353-0756 / FAX: 03-5353-0776 / E-mail: ag-press@toccf.com 〒163-1403 東京都新宿区西新宿 3-20-2

最新情報：本展特設インスタグラム @gtsl_exhibition

ガラスの器と静物画

山野アンダーソン陽子と18人の画家

みどころ

1. ガラス作家、山野アンダーソン陽子



撮影：高橋健治

ガラスに惹かれ、なかでもガラス食器という量産されるクラフトに関心を抱き、北欧最古のガラス工場であるコースタ内の学校で吹きガラスの手法を学ぶ。ガラス産業が栄えたスウェーデンにおいて、17世紀より用いられてきた工場制手工業の手間ひまのかかる技術にこだわり、制作を続けている。同じものをつくっても手作業ゆえに一つひとつが微妙に異なり、それはちょうど私たち皆がそれぞれに違うことと似ていると、山野は考えます。かたちのわずかな歪みや使い心地の微妙な違いなどのささやかな個性は、使い手との間にじわじわと生まれる「食器との関係性」を考えるきっかけになったといいます。

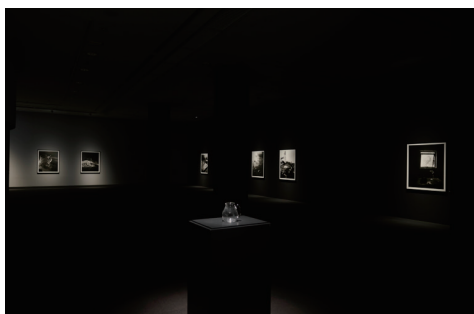
2. ガラス、写真、絵画の「関係性」を思う



カール・ハムウド
《Still Life With Books and Glass》
2021
Courtesy of the artist and Galleri Magnus Karlsson

会場に並ぶのは日々の暮らしでも使いやすいようなクリアーガラスの食器と、それらが多種多様な表現で描かれた絵画、画家のアトリエで撮影されたガラスの写真。それぞれを作品として鑑賞しながら、生活の道具としての使い心地を想像し、美術館で鑑賞することと自宅で道具として使うこと（を想像すること）のあいだを行ったり来たりすることで、作品と道具、鑑賞することと使用すること、美術館と自宅、フィクションとリアルなどが混ざりあい、その境界が曖昧になっていくことでしょう。それらが作品ジャンルを飛び越えて関係しあい、さらに見る人が関係することで新たな関係性が紡がれることを期待します。

3. 会場ごとに異なる展示構成と空間演出



広島現代美術館での展示風景
撮影：三部正博

この展覧会は、広島市現代美術館と熊本市現代美術館を巡回し、会場ごとに展示構成が変わります。各キュレーターが Glass Tableware in Still Life プロジェクトを解釈し、会場にふさわしいコンセプトの元、作品を選び、配置します。例えば第一会場の広島では、ガラス、絵画、写真をそれぞれ作品ジャンル毎に展示し、作品と作品、作家と作家、ジャンルとジャンルのあいだの関係性を想像してもらうような会場構成になっています。第二会場の東京では、個性豊かな画家たちと山野の対話に光をあて、そこで交わされたやり取りやストーリーとともに、ガラス食器について思考します。

本展に関するお問い合わせ

東京オペラシティ アートギャラリー 【展覧会担当】 福島直 【広報】 市川靖子、吉田明子

Tel: 03-5353-0756 / FAX: 03-5353-0776 / E-mail: ag-press@toccf.com 〒163-1403 東京都新宿区西新宿 3-20-2

最新情報：本展特設インスタグラム @gtsl_exhibition

作家プロフィール

三部正博 (さんべ・まさひろ)

写真家。1983年、東京都生まれ。東京ビジュアルアーツ専門学校を経て、写真家泊昭雄氏に師事し、2006年に独立。2015年頃より人為的なものと自然のコンポジットを超えて働きかける風景をおさめたパーソナルワーク「landscape」を撮り続けている。美術、建築に加え、音楽、ファッションの分野においてもコミッションワークを手がける。

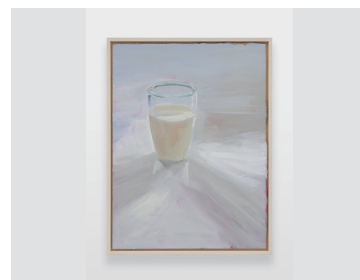
《イルヴァ・カールグレンのアトリエに佇むガラス食器》2022



アンナ・ビヤルゲル Anna Bjerger

1973年、スキャルフェ生まれ。スモーランド在住。セントラル・セント・マーチンズ卒業後、ロイヤル・カレッジ・オブ・アート修了。日々の暮らしの中で目にするモチーフや光景を即物的に切り取りながら、文学性を湛えた絵画を実現できているのは、光と影に対する画家の繊細な感覚、そしてアルミ板という実験的な支持体のみごとに活かした効果による。

《milk》2021 Courtesy of the artist and Galleri Magnus Karlsson



アンナ・カムネー Anna Camner

1977年、ストックホルム生まれ。同地在住。スウェーデン王立美術大学卒業。薄い膜を描くことが多く、画面いっぱいに広がる膜はしなやかなまま凝固し、息のつまる密閉感と皮膚のような通気性をあわせ持ち、無機的でありながらエロティックでもある。作家・写真家のカール・アブラハムソンはカムネーの作品を「色彩あふれる暗闇 (A Colourful Darkness)」と称している。

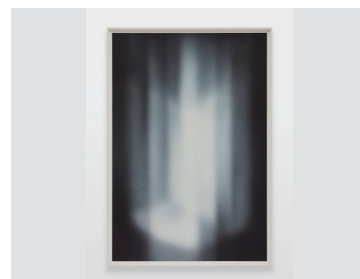
《The Naked Dive》2020 Collection of Jan Johansson



イルヴァ・カールグレン Ylva Carlgren

1984年、ルーレオ生まれ。ストックホルム在住。2012年、ヨーテボリのヴァランド芸術学院で修士号を取得。抽象的な水彩画を手がける。初期には香水瓶などをモチーフに、瓶の造形、光の反射、屈折、プリズムなどを丹念に描いていたが、近年は具体的な対象物を描くことをやめ、闇、陰影、光そのものの表現を中心とする。ウォッシュ技法を基本に、水彩を細かく何層にも重ねる独自の手法で制作している。

《the difference is spreading #2》2021 Collection of the artist



イエンス・フェンゲ Jens Fänge

1965年、ヨーテボリ生まれ。ストックホルム在住。1994年、ヴァランド芸術学院卒業。ある形に沿って切り抜かれた様々な素材やメディウム（油彩、鉛筆、ビニール、カードボード、生地等）をコラージュする作品で知られる。伝統的な絵画ジャンルの序列も無関係に、肖像、静物、室内風景、都市景観、幾何学的な形が、同一画面上に並置される。複数の遠近法が用いられることで空間は多彩に変化し、またイメージ同士に様々な関係性もたらされて、複雑かつ魅力的な世界が構築される。

《Yoko's Glass》2021 Courtesy of the artist and Galleri Magnus Karlsson



カール・ハムウド Carl Hammoud

1976年、ストックホルム生まれ。同地在住。ヴァランド美術学院修了。しばしば描かれる本や椅子などの静物は、絶妙なバランスを保ったまま積み重なり、斜めや横からの光に照らされている。誰かの仕業でそうなったのではなく、静物自らの意志でそのように在ることを選んだかに見えるのは、絵画に時間を内包しようとした未来派のスタイルを彷彿とさせるところが大きい。

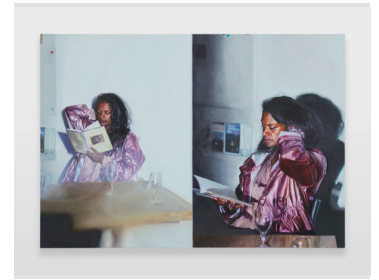
《Still Life With Books and Glass》2021 Courtesy of the artist and Galleri Magnus Karlsson



ニクラス・ホルムグレン Niklas Holmgren

1974年、リュクセシ生まれ。ストックホルム在住。2001年、スウェーデン国立美術大学にて修士号を取得。ハイパーリアリスティックとも言える、光と色彩を駆使した描き方を特徴とし、一瞬の中にある人の心理や、目に見えないインタラクティブなものを示唆させる作風で知られる。また、身近なものを注意深く観察し、人物やものの核心を純化させて表現することを試みている。映画監督、脚本家としても活躍する。

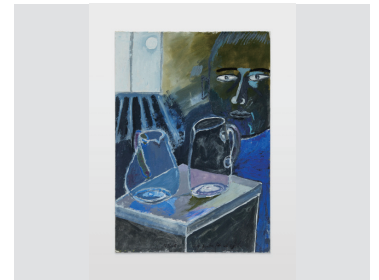
《Anusha, double》2021 Collection of Marie and Fredrik Eneqvist, Stockholm



CM・ルンドベリ Carl Michael Lundberg

1972年、ストックホルム生まれ。ヴァルビッキ在住。スウェーデン国立美術大学修了。アネッツ・スンネビ（1951- /スウェーデンの画家）やヘルキ・フルオビブション（1953- /アイスランドの画家）、ウルフ・リンデ（1929-2013 /スウェーデンの美術批評家）らの影響を受けながら、身の回りのあらゆるものを日々描いている。小さな画面の中で、生と死、光と影にまつわるモチーフが奔放なパレードを見せ、すべてが等しくその存在を謳歌している。

《VANITAS》2018 Collection of Yoko Andersson Yamano



マリーア・ノルディン Maria Nordin

1980年、リンシェーピング生まれ。ストックホルム在住。2010年、スウェーデン国立美術大学にて修士号を取得。大型フォーマットの水彩画で、人体を主要モチーフとして扱う。ある瞬間を静止させ、ストップモーションのように描き出される人体の動きは、観る者の身体感覚に直接的に訴えかける。ある経験が人体を通してどのように表現されるのか、あるいは、身体的経験がどのように形作られるのかがテーマとなっている。

《Plateau》2021 Courtesy of the artist and Galleri Magnus Karlsson



レベッカ・トレンス Rebecka Tollens

1990年、ストックホルム生まれ。フランス系スウェーデン人。2009年、フランスに移住。2018年以降、ストックホルムを拠点に活動。2011-2015年、パリのLISAAならびにエコール・ド・コンドにて学び、修士号を取得。紙、木、壁など様々な支持体に、木炭やグラファイト鉛筆による木炭画を手がける。目に見えないものを明らかにする夢や民間伝承、人生の物語から断片を集め、既知と未知、具象と虚構との挟間にある感覚を探るべく、絵画の中で独自の超現実的な空間を創出する。

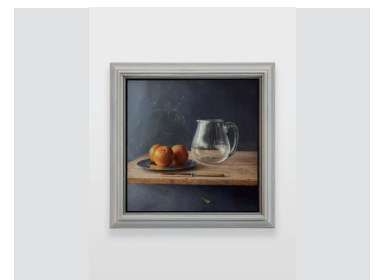
《Fellowship / Hexagram 13, T'UNG JEN (I)》2020 Collection of the artist



石田淳一（いしだ・じゅんいち）

1981年、埼玉県生まれ。埼玉県在住。2004年、日本大学芸術学部美術学科卒業。オーソドックスな技法で古道具や果物など身近なものをモチーフに静物画を描く。眼前の事物にじっくりと向き合うことで生まれる精緻な油彩画には、それら事物が包含する時間が光とともに描かれる。

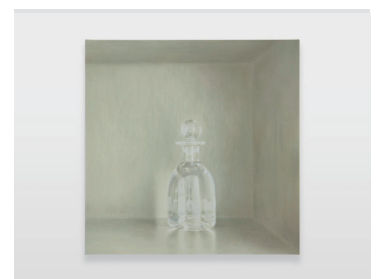
《アトリエの陽光-山野アンダーソン陽子のガラス器と私-》2021 一番星画廊蔵



伊庭靖子（いば・やすこ）

1967年、京都府生まれ。京都府在住。1990年、嵯峨美術短期大学版画科専攻科修了。陶器やクッションなど身近な対象物をモチーフに、自然光の中で自ら撮影した写真をもとに油彩画などを制作する。モチーフの色や反射する光、あるいは画家の眼と対象との間にある距離や空気、それらの質感に注目し「見る」ということを考える。

《untitled 2021-15》2021 Collection of the artist



小笠原美環（おがさわら・みわ）

1973年、京都府生まれ。1991年にドイツに渡り、現在、ハンブルグを拠点とする。ハンブルグ芸術大学ではノベルト・シュワンコウスキー、ヴァーナー・ブットナーに師事した。グレイッシュな画面に光と影を湛えた静謐な絵画は、周囲の空気や時間をも内包している。哲学的な課題や社会的な問題を意識しつつも日常の風景を題材とし、意外な角度からの構図で見る者へ視点の変換を促す。

《Still》2022 Courtesy of the artist and MAHO KUBOTA GALLERY



木村彩子（きむら・さいこ）

1979年、東京都生まれ。佐賀県在住。2003年、東京造形大学造形学部美術学科卒業、翌年同大学研究生修了。植物を中心とする身近な自然を絵画のモチーフとする。対象物や風景を写真で撮影し、蜜蝋を混ぜた油絵具で制作する。風と光をはらんだ透明感のある画面を特徴とし、日常で自然が見せる一瞬の美しさを捉える。装画や挿絵なども手がけ、現在は読売新聞連載コラム「日をめくる音」（黒井千次著）挿絵を担当。

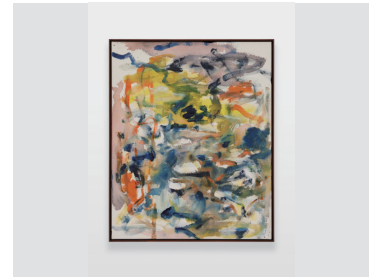
《Stem for pink / 7 May》2021 Collection of the artist



クサナギシンペイ

1973年、東京都生まれ。東京都在住。2001年、セツ・モードセミナー卒業。2002年より作品を発表し、国際的に活動している。未処理の画布にアクリル絵具を用い、即興的な筆致と滲みの特徴とする風景画を制作する。豊かな色彩で描かれた作品には具体的なディテールはなく、明確な場所や事象というよりも、鑑賞者の中にある時間と場所の記憶を呼び起こさせる。

《hum (madeleine-I)》2021 Collection of the artist Courtesy of Taka Ishii Gallery



小林且典（こばやし・かつのり）

1961年、兵庫県生まれ。東京都在住。1987年、東京藝術大学美術学部彫刻科卒業。同大学院修士課程修了後、1989年にブレラ美術アカデミーに入学。彫刻にとどまらず、写真・水彩・版画など様々な表現方法で作品を発表し、ブロンズなら原型から鋳造まで、写真ならレンズやカメラを自作するところから暗室作業まで、全てのプロセスを徹底して自身の手で行う。

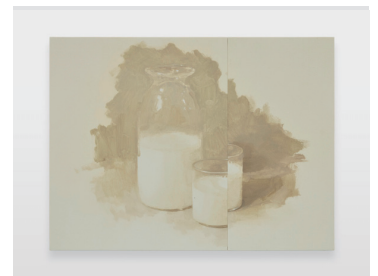
《静物学》2019 Collection of the artist



田幡浩一（たばた・こういち）

1979年、栃木県生まれ。現在、ベルリン拠点。2004年、東京藝術大学美術学部先端芸術表現科卒業後、2006年に同大学大学院美術研究科油画専攻を修了。動的な要素を含む絵画作品や、絵画的制約をもって構成される映像作品などを制作している。メディア間や支持体自体に存在する「ずれ」を通して、目の前にある対象のあり方をひとつにとどめず、流れた時間や空間をめぐって内包し得る多な図像を丁寧に浮かび上がらせている。

《One way or another (glass of milk and tall bottle) #01》2022 Collection of the artist Courtesy of Yutaka Kikutake Gallery



本展に関するお問い合わせ

東京オペラシティアートギャラリー 【展覧会担当】 福島直 【広報】 市川靖子、吉田明子

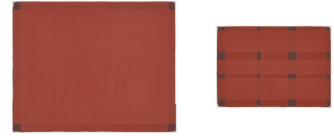
Tel: 03-5353-0756 / FAX: 03-5353-0776 / E-mail: ag-press@toccf.com 〒163-1403 東京都新宿区西新宿 3-20-2

最新情報：本展特設インスタグラム @gtsl_exhibition

八重樫ゆい (やえがし・ゆい)

1985年、千葉県生まれ。東京都在住。2009年、東京造形大学造形学部美術学科絵画専攻卒業、2011年同大学院修了。2020年から2021年まで、ニューヨークに滞在。布生地のパターンなどを思わせる幾何学的な絵画を描く。八重樫の作品の特徴はその独自のシステム化された描き方にある。何色にするか、どの道具を使うか、どのような順序で描くか、工程をひとつひとつ丁寧に確認し、淡々と描かれた絵には静かで心地よい緊張感が生まれている。

《under the light》2021 Collection of the artist



センナイ・ベルヘ Senay Berhe

1979年、ストックホルム生まれ。映像を独学で学び、ドキュメンタリー、コマーシャル、ミュージックビデオ、ショートフィルム、写真など、多岐にわたるジャンルを手掛け、受賞も多い。特にセネガル、コートジボワール、アンゴラ、ガーナ、ケニア、南アフリカのアーティストたちの活躍を追ったドキュメンタリー・シリーズ「Afripedia」(2014)は、これまで世界各地70以上の映画祭で上映されている。

広島現代美術館での展示風景 撮影：三部正博



本展に関するお問い合わせ

東京オペラシティ アートギャラリー 【展覧会担当】 福島直 【広報】 市川靖子、吉田明子

Tel: 03-5353-0756 / FAX: 03-5353-0776 / E-mail: ag-press@toccf.com 〒163-1403 東京都新宿区西新宿 3-20-2

最新情報：本展特設インスタグラム @gtsl_exhibition

広報用画像

1



2



3



4



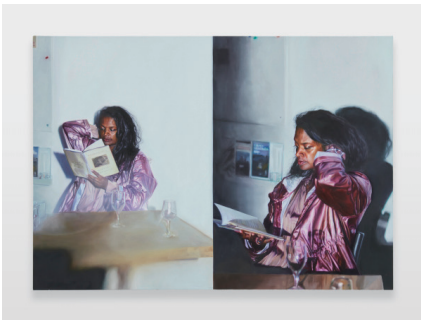
5



6



7



8



9



1. 三部正博 《木村彩子のアトリエに佇むガラス食器》 2021
2. 三部正博 《伊庭靖子のアトリエに佇むガラス食器》 2021
3. 三部正博 《ニクラス・ホルムグレンのアトリエに佇むガラス食器》 2022
4. 三部正博 《イルヴァ・カールグレンのアトリエに佇むガラス食器》 2022
5. 木村彩子 《Stem for pink / 7 May》 2021
6. 伊庭靖子 《untitled 2021-15》 2021
7. ニクラス・ホルムグレン 《Anusha, double》 2021
8. イルヴァ・カールグレン 《the difference is spreading #2》 2021
9. カール・ハムウド 《Still Life With Books and Glass》 2021

広報画像のご使用について 以下より DL してください。

<https://www.dropbox.com/scl/fo/ek2hz22trn2xlyyg7zkk1/h?rlkey=7q8dauu0pbnlzsjtfy335tm6m&dl=0>

- ・ご利用は本展をご紹介いただける場合に限りです。使用の際はキャプションの表記をお願いいたします。
- ・画像掲載には、キャプション・クレジットの表記が必要です。
- ・画像の改変（トリミング、変形、部分使用、文字のせ）はしないでください。
- ・情報確認のためメールにて校正を送付ください。（校正不可の場合は、その旨ご連絡ください。）

本展に関するお問い合わせ

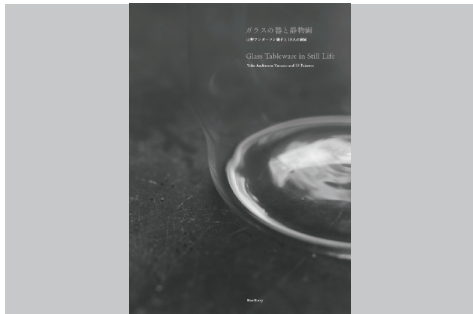
東京オペラシティアートギャラリー 【展覧会担当】 福島直 【広報】 市川靖子、吉田明子

Tel: 03-5353-0756 / FAX: 03-5353-0776 / E-mail: ag-press@toccf.com 〒163-1403 東京都新宿区西新宿 3-20-2

最新情報：本展特設インスタグラム @gtsl_exhibition

関連書籍・オリジナルグッズ

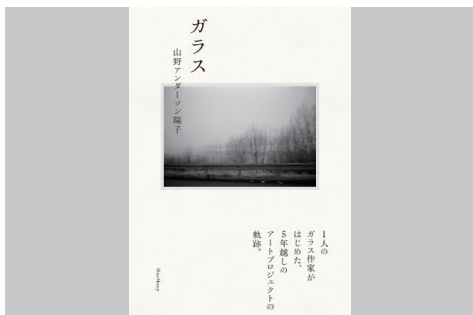
展覧会のすべてを収めた公式図録



本書のために撮り下ろした出品作品（絵画、ガラス、写真）の図版および作品リストを収録するほか、山野アンダーソン陽子のインタビュー、各会場のキュレーターによる論考、ガラス史の専門家によるコラムなど充実のテキストで、展覧会の全貌をまとめました。山野によるエッセイ『ガラス』と合わせれば、Glass Tableware in Still Life プロジェクトのすべてがわかる決定版のセットに。

ブックデザイン：須山悠里
価格：3,200円（税別）
2023年11月1日発行

山野アンダーソン陽子による書き下ろしエッセイ『ガラス』



Glass Tableware in Still Life プロジェクトの発案者であるガラス作家・山野アンダーソン陽子が、本展のために書き下ろした8万字超のエッセイ。スウェーデンを拠点にガラス作家として活動するまでのこと、日々思うガラス食器のこと、プロジェクトのきっかけ、画家やメンバーとのやり取りなど、瑞々しい言葉で紡がれます。

文：山野アンダーソン陽子 写真：三部正博
ブックデザイン：須山悠里
価格：1,400円（税別）
2023年10月10日発行

展覧会オリジナルブランド「Glass Tableware in Still Life」



会場で販売する展覧会グッズは、本展の核となる Glass Tableware in Still Life プロジェクトを自宅に持ち帰れるオリジナルブランドとして展開。ブランドのためのキービジュアルを新たに起こし、コースター、ランチョンマット、ガラスクリーナー、エプロン、キャンドルなど、ガラス食器にまつわる食卓&キッチン用品を多数そろえます。

デザイン：田部井美奈
価格：約12アイテム、660円～11,000円前後（予定）

写真を着る。画家たちのアトリエTシャツ



山野は Glass Tableware in Still Life プロジェクトの本を制作するため、日本、スウェーデン、ドイツにある画家たちのアトリエを訪問し撮影を敢行。写真家・三部正博が切り取った、各アトリエに佇む絵画やガラス食器の写真をTシャツにしました。オリジナルボックスに収められ、山野が書いた画家たちとのエピソードを添えた、アートピースのようなアイテムです。

写真：三部正博 デザイン：田部井美奈
価格：8,000円前後（予定）

本展に関するお問い合わせ

東京オペラシティアートギャラリー 【展覧会担当】 福島直 【広報】 市川靖子、吉田明子
Tel: 03-5353-0756 / FAX: 03-5353-0776 / E-mail: ag-press@toccf.com 〒163-1403 東京都新宿区西新宿 3-20-2

最新情報：本展特設インスタグラム @gtsl_exhibition